

『質屋の女房』 遺聞… 戦後零細質屋史覚え書き

片山 隆 男

はじめに

昭和二〇年、戦争が終わった。その年一月生まれの私どもの心ついた頃でも、住まいの周辺（神戸市兵庫区）は焼け野原であった。地面にめり込んで残っている焼夷弾を父に教えてもらったこともある。まだまだ戦災の傷痕は生々しかったのである。その空き地に人々は野菜を植え、花を咲かせた。夏にトマトの青臭いにおいが拡がっていた。

両親は昭和二十七年に質屋を本格的に営業するために、神戸市兵庫区に店舗と倉庫を建設する。ただ、その数年前に少し南に下がったところにあった新築の家を購入して質屋を開業していた。国鉄神戸駅の山側、大倉山公園のすぐ北側である。公園には戦時中にあった高射砲陣地のあとを利用して簡易な屋根をつけた家にひとりが住んでいた。兵隊の宿舎は住宅となっていたが、この建物はかなり背が高くしかも木造

であったことから電柱のような丸太を支え棒としてかろうじて建っていた。窓にかけられた洗濯ものが夕日に輝いていたことを思い出す。そしてその周辺には、長屋づくりで粗末な平屋の市営住宅が建ち並んでいた。とにかく住宅が絶対的に不足していた時代である。

このような時期に両親は質屋を開業した。父についてはすでに著した。母はどうかであったのか。明治四四年生まれ、農家の長女に育った。母はどのような気持ちで父とともに質屋暮らしをしようとしたのか。

戦後、生活が激変した人たちが多かったと思う。戦地から引き揚げた一族もいた。我が家に一時期同居していた親族もいた。新たな時代、新たな生活と向き合うことを余儀なくされた。そのとき、女性は新しい時代に向き合わざるを得なかった。それは、女性の社会進出ととらえることもできよう。そのひとりが母であり、質屋の手伝いをし

ながら果敢に生きたと思う。

暮らし・戦後の風景

父が最初に質屋を開業した家は、新築とはいえ倉庫はなかった。二階が倉庫になっていた。質屋営業法は昭和二五年五月八日に施行されたが、倉庫がなくても営業できた時代である。朝鮮戦争がおきた昭和二五年以降、営業はきわめて順調であったようだ。洋服屋が洋服生地を巻反のままで大量に質入れし、それが二階を占拠していた。その上で遊んだことを思い出す。一階は店、居間、台所などで構成され、食事は居間で丸い折りたたみ式の卓袱台をつかっていた。卓袱台は私の勉強机でもあった。店の入り口は二カ所、それぞれ鉢植えの樹木が配され、人の出入りがわかりにくいように工夫されていた。それと裏口もあったがそこは家族のみの出入り口であった。炊事場からは直接外へ水が流れる仕組みで、ときどき青大将が首をだした。それを父が竹箒で草むらに逃がす姿を記憶している。大倉山公園にまむしが出た時代である。

家の東隣は、お祖母さんと孫の二人住まいの家であった。孫の名前はマイクといい、私は「マイクちゃん」と呼んでいた。訪れるひともほとんどなくその家だけが静まりかえっているようであった。彼は日本人とアメリカ兵（下士官クラスと記憶している）との間にできた子供で、色の白い物静かな子であった。ほとんど子供が訪れることもなかったが、私は仲良しでよく遊びに行った。おそらく母が鷹揚で気に

しなかったからであろう。彼が引越しをすることでその後会う機会もなくなったが、あるとき母と一緒に歩いてお祖母さんと出会った。マイクちゃんが引越した先の家の二階の階段から落ち、亡くなったことを聞かされた。子供心にマイクちゃんがとても薄幸で、それが生まれながらに定められた運命のように思われた。そう思われても不思議でないほど、静かでおとなしい子供であった。お祖母さんが母に随分お世話になったと何度も繰り返しお礼をいっていたのが印象的であった。

また北隣は、兵庫高校の数学の先生の家、とても話し上手であった。夏、家の前に縁台を出す家が結構あった。先生はそこで夕涼みをしながら、高校時代の寮を舞台にした怪談を話す。これが真に迫っていて、息を殺して聞き入った。その北隣は女性だけの家。おばあさん、おかあさん、そして子供二人の四人、下の子供が私と同級生だった。おかあさんは、当時珍しいケーキの置き売り（喫茶店などに置いてもらって販売する）をしており、それが主な収入源であったようだ。おねえさんは、「お母さんごっこ」が上手であった。子供役は妹や私で、近所の子供がときどき加わった。焼け跡にゴザをひき、泥団子がごはんやおかずであった。

家の前には、東西と南北に通りがはしり、南に行けば兵庫県立医科大学付属病院の塀が続きやがて湊川神社そして国鉄神戸駅へ、北に登れば平野市場があった。阪神・淡路大震災後、市内の市場は閉まっていたが二番目に開いた市場として報じられた。その行き止まりの山上

には祇園神社がある。また、その東隣は祥福寺という禅寺がある。当時、山田無文師が管長で、小学校などでよく講演をされ母も聞きに行ったことがある。のちに花園大学の学長になられたと聞いた。時々、修行僧が托鉢に回ってきたが、それはいまま変わりない。通りの向かいには商店と仕舞屋が混在していた。食料品店、うどんや（夏は自家製のアイスキャンデーを売っていた）、駄菓子屋、小間物屋などがあった。

幼稚園と小学校一年生まではその家から通った。当時聖公会系の幼稚園（昇天幼稚園）があり、賛美歌をうたったこと、クリスマスの劇で東方から来る博士を演じたこと。なかなかまとまらない演技に担当の西田先生が躍りになっていたことを思い出す。当時、幼稚園にいく子供は少なくいままつきあう友人がいる。

小学校に上がったのが、昭和二六年四月、校舎は真っ黒に塗られていた。防空のために戦時中に塗られたままであった。それが校舎の新築とともに古い校舎が塗り替えられるのが、昭和三一年であったと思う。二年生から新しい家に移った。小学校の一・二年（昭和二六・二七年頃）は二部授業であった。たとえば一年生が朝から昼まで授業を受ければ、昼に給食を食べて終了。同じ教室で午後から二年生が給食を食べて授業をうける。団塊の世代のはじまる二年前に生まれた私も生徒数は多かった。教室が不足していたのである。給食に必要な食器類は各自で用意するが、多くはアルマイトの食器を使った。朝、並んで学校へ行くときは、カバンに括り付けられた給食袋（食器類が入っ

ている）がカタカタと鳴った。

給食は脱脂粉乳を湯で溶かしたミルクが主であった。それにコッペパンとおかずが少々。下駄履きで登校した生徒が給食を自宅に持ち帰る姿を記憶している。欠席した生徒がいると、近くに住む生徒が先生に指示されて、パンとマーガリンを紙に包んでもらって帰宅途中に届けるのである。

帰りは寄り道するのが常であった。職人の家を回りながら帰るのである。石工、鍛冶屋、竹籤を使って籠や箆などを編む家（老夫婦が土間でゆっくりと作業する姿が目につく）、欄間をつくる作業場、洋服箱を作る家（同級生で同姓の片山君の家）、ブリキを加工する家、畳屋、数えればきりが無い。

その途中に少年鑑別所ができた。それまではその周辺は空襲で破壊された工場跡が広がっていた。古い銀行の支店がふたつ放置され荒れるがままであった。そのひとつに管理人が住むようになり、その子供が同級生になった。おかげで、埃まみれの銀行のカウンターのうえで遊んだ。その建物が他に利用されることが決まり、いつの間にか管理人の一家は引越していった。

物売りも回ってきた。竹竿売り、鋳掛け屋、豆腐屋、魚売り、金魚売り、風鈴売り、変わったところでは、汽笛をならす羅宇替屋（羅宇の差し替え、というさびの聞いた声を聞かせるお爺さんを思い出す）など。もちろん、紙芝居屋も何人かいた。そのひとはとても品のいいおじさんで、戦前それなりの立場の人であったことを偲ばせた。さ

らに、虚無僧が来たし正月には尾張漫才、獅子舞が訪れた。それからロバのパン屋。蒸しパンが名物であったように思う。

宣伝も多彩であった。カバヤの宣伝カーは、カバのぬいぐるみを被っていた。なぜか米屋の前でおこなわれる歌謡ショー。道のまなかで歌謡曲にあわせて侍姿や旅姿の男女が踊るのである。なぜそのような踊りが米屋の宣伝になるのかいまだに不明である。その米屋と電器屋の初荷はにぎやかであった。初荷の幟がはためき、荷を降ろして三三七拍子、その調子の良さが心を沸き立たせた。

新装開店の宣伝は、チンドン屋。市場で店が開店すると、回ってくる。子供がついてまわるのである。さらに、飛行機を使った宣伝もあった。低空を飛びながら、マイクで呼びかけ、ピラをまく。それを我々が拾い集める。車の少ない時代ならではの宣伝であった。

車といえば性能が悪くよくエンコした。エンジンがかからないことをエンコといった。六年生の時、タクシーがエンコし、運転手に頼まれて、坂の上まで何人かで押した。坂を下りながらエンジンをかければわかる。そのタクシーで学校まで送ってもらった。十数人が折り重なるように乗っているから、先生が驚いていたことが記憶にある。

当時、イエはソトと繋がっていた。近所の人たちは頻繁に行き来した。つくったおかずを隣や向かいにもっていく。さらに、到来物があれば、近所にわかる。大概の家にはおじいさんやおばあさんがいたから、口上はたとえば「おばあちゃんに上げて」であった。これをお裾分けといった。子供はときに近所の家（同じ世代の子供のいる家）で

夕飯をご馳走になることもあった。これもお互い様で、友達が私の家で食事をしていくこともあった。

朝から物売りの声が聞こえた。学校から子供たちがかえってくるのはその話声でわかった。それから夕食までの時間は子供が焼け跡遊ぶ声が聞こえていた。

そして、季節や暦もあった。正月、新しい服や履物が揃えられ、それを身に着ける喜びはなにも換えることができないものであった。小学校では、元旦に学校へ行き、先生に挨拶するのが習わしであった。新しい運動靴で出かけ、帰りに百字帳をもらった。雛祭り、五月の節句、ささやかではあったが母の散らし寿司が楽しみであった。

これらの風景はおそらく戦前の暮らしをほとんどそのまま映したものである。加藤秀俊「二〇〇二」によると、昭和初期、東京の郊外の朝は物売りの声でにぎやかであったという。それは一日中続いたように、私の幼少期もそれに近い様子があった。その後周辺に商家が増えていった。みそ・醤油、漬物から何でも商う店、薬局、貸本屋（これは町内に二軒あり、そのうちの二軒の娘さんは小学校一年生の時の担任の先生）、駄菓子屋、お茶屋などであった。

さらに家のすぐ山側に小さな市場ができた。豆腐屋、肉屋、八百屋、寿司屋など、一応のものは揃った。新築した家の柱や戸が檜ということもあり、毎日のように磨かされた。磨くには、豆腐のおからと豆腐の絞り汁がいいということで、私が学校に行く前に市場の豆腐屋から買って帰った。おからを袋に入れて磨くのである。絞り汁は雑巾

がけに使い柱と戸をもつぱら拭く。これは結構きつい作業で、母は晩年、磨いた夜は腕が疼いたと言っていた。

家の中はいまほど家具の類はなかった。和箆箆は母の嫁入り道具で、黒檀の三段組であった。これは空襲を逃れ丹波に疎開させていたものである。叔父のひとり、箆箆をはじめ家財道具を荷車に積んで運んだことを話してくれた。空襲を逃れた箆箆も、阪神・淡路の大震災で壊れた。

箆箆の三段組、これを加藤は「三つ重ね昭和型」と記しており、昭和五年から一〇年代にかけての新商品と紹介している。両親の結婚は昭和一五年、新商品を逃れてもらったことになる。

洋服ダンスがはいったのは、もつと後、私が高校生になった頃か。洋服ダンスが全国に普及するのは、昭和三〇年代と加藤は述べているが、我が家にもその頃入った。ほかに茶箆箆があった。また、いつ頃入ったのか氷を入れる冷蔵庫があった。夏になると、氷屋が毎朝届けに来ていたことを記憶している。それと折りたたみ式の卓袱台である。ラジオがささやかな整理ダンスのうえに載っていた。家具といえは、これぐらい。質流れ品の扇風機があった。長く使うと、モーターの部分が発熱することから、濡れたタオルを置いて冷やしていた。田宮寅彦の作品の中に神戸の生活を描いたものがある。海岸沿いにある川崎造船所などに勤めるサラリーマンの朝晩行き交う姿を描いているが、我が家にはその姿はなかった。両親ともにいつも家にいた。休日は月に三回、七日、一七日、二七日である。「しち（七）や」に

かけたのであろう。しかし、客はその頃遠慮なく休日も来ていた。結局、休みはないのも同じであった。しかも、朝早くからよる遅くまでである。年末ともなれば、請け出す客でにぎわった。当時質屋を利用する人のなかに、式服、晴れ着を普段買入れしておき、正月や冠婚葬祭など必要なとき請け出すものがいた。私が中学に上がると大晦日、買い物帰りの奥さんについて、請け出した品物を家まで届けたこともあった。大きな風呂敷を首に巻いて持つていくのである。質屋のみならず商売人の子供は家業を手伝った。

女性の仕事は、家事が主であった。掃除、これは道路が舗装されていないところが多く、いつの間にか廊下や畳の上は砂埃がうっすらつることが多かった時代である。とくに、夏はひどく、朝夕掃除をすることが常態であった。洗濯も洗濯機がないわけで、手洗いであった。食事の支度、子供の世話、一日中母は動いていたように思う。電灯の下で繕いをするときが、ゆっくりしているように見えた。

服装は着物が多かった。アパッパと呼ばれる簡易服も着ていた。着物は自分でも縫っていた。私のために着物を作ってくれたが、それはいまも残っている。

商売人の妻はこのほかに、商売の手伝いがあった。

『質屋の女房』

安岡章太郎の小説に『質屋の女房』がある。昭和一五年頃の質屋の状況を描写している。黴くさい空気の漂う倉庫、質屋の暖簾をくぐる

風景、おそらく戦前から続く質屋には、これと似た様子があったと思う。戦後新規に開業した質屋が異なるのは、真新しい家を構え、商売をおこなったことであろう。小説では質屋のカウンターは櫛であるが、これは不思議にも我が家でも同じであった。

朝六時頃に起き、店の前を掃き、水をまくのは父の役目で、母は台所で食事の用意をしていた。客の応対は主に父で、質屋協同組合の用事で父が出かけるときには母がなんとか見よう見まねでこなしていたように思う。

昭和二五年朝鮮戦争の勃発とともに、質屋の営業も活況を呈するとは前述した。それまでは荷が止まったような状況であったのが一変する。国鉄神戸駅前にあった進駐軍（ウエストキャンプ）の兵隊に加えて神戸港に入港する軍艦の米兵も質入れにすることが多くなった。酒に酔い女性を連れてくることが多く、トラブルも増えた。靴のまま上がってくる米軍の兵士もいた。母の気苦労も大変だったと思う。

警察の力も充分及ばず、世情も騒然としていた時代、とにかく自分を守る必要があった。泥棒にも何度も入られかけた。当時質屋は現金がある、金持ちであるとの認識があったようだ。水上勉『飢餓海峡』は戦後の状況を見事に描いているが、襲われるのは質屋である。小説での事件は昭和二二年に起きている。我が家にも何度も入ろうとした痕跡があった。窓には嚴重な格子が入っていたが、それを破ろうとして使ったと思われるドライバーが残っていたこともある。しかし、周辺は人が多く住み、商売をしている家も多かったから、昼間の押し込

み強盗はなかった。最も恐ろしかったのは、新しい店舗に入りかけた泥棒であった。それは昭和三〇年代に入ってからであった。鉄格子のはいった戸を開けようとして誤ってガラスを割った。割れたガラスが下に落ち、その音に気づいた母が誰何する声に、泥棒は様子を見ながら退去していった。通報によって警察官が多数現れ、パトカーの点滅が印象的であった。それほどの警官が来なくてもと思うほどの人数であったが、しかしそうではなく、後日捕まった犯人は、ごく近所の町で重役夫人を殺害していた。

戦後、覚醒剤の類が市中に出回った。ヒロポンがその代表的なものである。ヒロポン患者もよくやってきていた。ヒロポンの薬害が問題になり、警察が取締を強化したのが昭和二四年一〇月である。しかし、その後もヒロポンを用いるものも多く、小学校でヒロポンの薬害を描いた映画を観た。おそらく神戸は港町で沖仲仕をはじめとして力仕事に就くものも多くまた、進駐軍もおり十分に取り締まることはできなかつたと思われる。新しい店舗に移った直後、そこでヒロポン患者が暴れたことがあった。当時、質店はカウンター越しに人が進入できないように天井とカウンターの間に格子の入った戸を入れていた。可動式で大きな商品が持ち込まれると、上に移動させてカウンターとの間の空間を大きくして品物をなかに入れていた。我が家では格子の代わりに金網を入れていた。ヒロポン患者が暴れ、その金網は大きく凹んでいた。父は何を思ったのか、店じまいするまでそれを直さず残していた。

母は戦後、身体に障害をもった子供を抱え、商売をすることになる。父は私のために家でできる商売を戦後選んだ。これは晩年に聞いた。それに従った母はどのように気持ちや納め質屋に専念しようとしたのか。厳しい社会状況のなかでの新しい生活である。それを知りたいくつかの手がかりが記憶に残っている。端的にいえば、ローマ字の練習、雛人形への執着、そして私を街に連れ出すことであった。この三つの事柄は母の心の中で密接に繋がっていたように思う。

戦後、質草は衣類が中心であった。朝鮮戦争後はカメラ、時計など高価な品物が入質されるようになる。もちろん、見せかけの偽物も現れた。文字盤にたとえばセイコー一八石と書かれている。しかし、裏蓋を開けて中を見ると、別会社の石数の少ない機械が入っている。しかも機械が側よりも小さいためになかで機械が動かないように詰め物がしてあった。ときに質屋はだまされて、高い貸付金を渡すことがある。もちろん請け出すことはない。それでは、裏蓋をあけて機械を確かめればよいが、なかなかそれが開かないようになっていたのである。つい、預かることになる。この種の時計を、「競輪時計」と呼ぶ。この偽物は、競輪場や競馬場で儲けた人に「カネがなくなつたので買ってほしい」と言つて売りつける。それで競輪時計と呼ぶようになったが、このような商売がまかり通る時代であった。

その後各時計会社は次々とブランドをだす。たとえば、キングセイコー、グランドセイコーなどである。それに外国製の時計が出回るようになる。種類も増えたことから、入質される時計のメーカーや石数

を文字盤をみて確認しなければならない。しかしいわゆる横文字はわからない。質屋協同組合が発行している商品のカタログからなんとか判断しなければならぬ。このカタログは、東京と大阪の質屋協同組合が制作し全国の協同組合を通じて質屋に販売するようになっていた。かなり重宝されていた。母は私が小学校でローマ字をならうと一緒に勉強を始めた。熱心さのあまり、私は夏休みの日記をローマ字で書くことになる。二年間ほど続けたであろうか。母はその頃には文字盤をみてどの時計か判断できるようになっていた。

質草の中には質入れ人の家の歴史を物語るものもある。そのなかに記憶に残っているのが、江戸末期の雛人形である。おそらく大事に残されてきたその家の宝物であろう。私がみても上品な面立ちであった。それが質流れとなったのである。父はこれほどのものはないから残そうと言ったが、母は敢然と反対した。「持っていた人の念がこもっているから」というのが、母の言い分であった。

高校生の私にとってあまりに強硬に反対する母の態度は不可解であった。それが解決したのは、母の晩年、しかも最晩年であった。母の父、祖父は親戚から来た養子であった。七人の子供をもうけ、律儀で教育熱心な人であった。読書家でもあって、その本の内容を子供に聞かせる父親であった。その祖父が醸造業をしていた知人T氏のために請け判をする。T氏の長男は母の弟と篠山鳳明中学校(旧制)で同期であったという。昭和恐慌はそのような律儀な祖父の思いを奪うこととなる。母によると、家を明け渡すとき、家代々のひな人形を床の

間にずらりと並べ、涙して見納めたという。

その後のT氏はどうなったのか。存命している叔母に聞いても不明であった。ただ、昭和三三年に丹波杜氏組合が出版した『丹波杜氏』によると、杜氏のうちT氏姓のものが二名、兵庫県と大阪市の酒造会社で働いた記録が記載されていた。丹波は醸造業が盛んで、醸造の技術に長けたものがいた。冬季これといった作物もなく収入を得るために出稼ぎに出る者も多かった。醸造の知識を生かして、伊丹、灘などへ酒造りに出かけるものが出て、これを丹波杜氏といった。この出稼ぎを、江戸時代より「百日稼ぎ」と呼んだ。T氏のように醸造業をしていたものが杜氏となっても不思議でない。母から直接T氏のこととは聞いた記憶はない。余計なことは言わない母であった。

しかし、母の両親は神戸に出て、懸命に働きかなりの財産を残すことになる。それが祟ったのか、祖父は五〇代半ばで他界することになる。膀胱結核であった。母はそのような祖父を尊敬し、家を離れたときの雛人形への想いを持ち続けていたのである。父のいうことに逆らったことのない母がこのときだけは猛然と反対した理由がわかった。

さらに、母が意見をはっきり述べたことがあった。当時、質屋は利益の上がる業種のひとつであった。当然、新規参人も多かったし、めめ事も多い。たとえば、広告（電柱に巻き広告をだすのが一般的であった）をどの範囲まで出すかが大きなめめ事に繋がった。他店の領域と考えられる地域まで広告をだすと当然、組合に調停が持ち込まれ

た。新聞広告もトラブルの種になった。すべて組合幹部が乗り出すことになる。当時、質屋協同組合にカリスマ的存在の組合長がいた。藤田さんという方で、統率力のある人であった。質屋同士のもめ事、税務署との交渉、何をしても能力を発揮する人であった。この人が父を見込んで、副組合長兼会計に抜擢したのである。父はそれによく応え、随分と組合の資産を蓄えた。その藤田さんが病に伏した。組合はバスを仕立てて病氣平癒の祈願に行くことまでしたが、帰らぬひととなった。

その藤田さんの後継に父が指名されたのである。連日、幹部が我が家を訪れ、母を説得にかかった。これに母は敢然と反対した。理由は父が新規参人の質屋であつて、老舗ではないこと、組合長になると、宴会も多く体調を壊す危険性があるということであった。おそらく、後者が一番の理由であつたと思う。それには、ひとつの想い出が繋がっている。当時、神戸の花隈には芸者がいた。正月に、きれいに着飾り、稲穂の簪をつけて湊川神社に初詣に来る姿を覚えている。ある年、父と初詣にいったが、そこに芸者が二人来ていた。それを見て、父が出店の陰に私を引き入れた。さすがに中学生でもそこに何かを感じることになる。母もおそらく組合の副組合長に疑念を持っていたのである。もつとも、父にはとんだ濡れ衣かもしれない。花隈、花やかなりし頃の想い出である。いずれにしても、母の日頃のない強硬な姿勢について幹部はあきらめることになる。

母は水商売を危険なものとして感覚的に捉えていた。兄弟のなかに

遊びで零落したものはなくむしろ堅実に子供を育て財を蓄えた。それなのになぜか水商売を嫌い、そこで働く女性を「尾のない狐」と呼んで警戒していた。これは一般的にそう呼んだのであって、個々の女性を差別的に呼んだのではなかった。

かつて、遊郭が日本各地にあった。神戸も例外でなく、赤線（二葉新地、福原）、青線（春日野新地）、白線（神戸市）と（神戸市編『神戸市史 第三集 社会・文化編』）にある。母が神戸に来て住まいした近くにあったのは、二葉新地であろう。そして、福原は日本三大遊郭「三原」のひとつであるから、その名は聞いたことがあったに違いない。客の中にそのような女性もいたがむしろ母は父より優しかったし、彼女らの健康を気遣うこともあった。

さらにひとつ。質屋の営業状況に翳りが見え始めた昭和四〇年頃、同業者数名が我が家を訪れた。話の内容は、質屋に将来性がないこと、他の事業への展開を図りたい、については協力してほしいというものであった。表1にみられるように、神戸市の人口は増加しているにもかかわらず兵庫区（本区）の人口はむしろ減っている。また、昭和四〇年頃、神戸市及び兵庫区の私営質屋の件数が減少していることが表2よりあきらかである。その理由はいくつか考えられるが、神戸市に限っていえば、市の人口が中心部よりその周辺とくに北西部に移動する傾向が顕著になったことであろう。もともと兵庫区は、本区とそれ以外の地区とからなる。本区は六甲山より南、我が家がある地域である。それ以外は、有馬など六甲山より北側の地域である。神戸市統

表2 神戸市及び兵庫区の私営質屋の件数

年	神戸市	兵庫区
昭和9年	282	34
昭和10年	290	35
昭和11年	290	35
昭和24年	506	150
昭和25年	458	115
昭和26年	439	114
昭和30年	457	124
昭和33年	438	121
昭和36年	425	123
昭和39年	398	117
昭和42年	374	110
昭和44年	340	100
昭和47年	314	96
昭和50年	282	84

『神戸市統計書』より作成

表1 神戸市及び兵庫区の人口

年	神戸市	兵庫区
昭和20年	378,592	70,664
昭和21年	443,344	85,298
昭和22年	607,079	109,671
昭和23年	644,217	120,582
昭和25年	804,501	139,420
昭和30年	981,318	181,430
昭和35年	1,113,977	201,406
昭和40年	1,216,666	206,732
昭和41年	1,228,212	203,724
昭和42年	1,241,484	199,345
昭和43年	1,254,854	195,392
昭和44年	1,269,465	192,691
昭和45年	1,288,697	188,333
昭和46年	1,307,340	182,859
昭和47年	1,324,868	178,087
昭和48年	1,338,705	173,045
昭和49年	1,351,651	169,034

『神戸市統計書』より作成
注：兵庫区は本区のみ的人口

計書によると、昭和三二年、兵庫区は本区の他に「有馬、有野、山田」の三地区を含む。それが、昭和四三年には本区および「有馬、有野、山田、道場、八多、大沢、長尾、淡河」の八地区を含む地域に拡がっている。面積も、昭和三二年一五一・一四平方キロメートルから昭和四三年二六一・二二平方キロメートルに拡がっている。

本区以外の地域が北区として兵庫区より独立したのが、昭和四八年

である。さらに、西区が垂水区より独立してできたのが、昭和五七年である。それ以前昭和五五年には、人口の減少から生田区と葦合区とが合併し中央区になっている。結局、神戸市も中心となっていた兵庫区や生田区、葦合区の人口が減少、その周辺に移動するという、ドーナツ化現象がおこっていたのである。

零細質屋は支店をもたず顧客の中心は店舗の周辺地域にすむ人々であった。それ以外の遠方よりくる人のなかには、問題を抱えた商品を持ち込む人がいた。たとえば、ダイヤといつて偽ものを持ち込むものの、銀行のしまる寸前になるカバン屋（店舗をもたずカバンに宝石類を入れて売り歩く商売人、きわめて品質の悪い宝石類を売り歩くものがいた）などである。しかも彼らは銀行が閉まる三時直前にきて、「急にまとまった金が入用になった。いまからでは銀行は間に合わない」と言うのが常套句であった。質屋にゆっくり考える余裕を与えないで、かなりの金額を借りようとした。後に請け出すものはほとんどいなかった。

つまり、堅実な顧客は店舗の周辺に多かった。人口が流出すれば、顧客は減少する。その結果、中心部にある質屋はその将来に不安を感じ、様々な業種を兼ねるものがでてきた。もつともやりやすいのが、同じ金融業で急速に拡がった消費者金融、いわゆるサラ金である。また、古物商の免許を取得し、直接古物売買に乗り出すものもいた。しかし、父に会いに来た人たちはもつと違ったことを考えていた。

問題は、その「他の事業」の内容であった。俗に言うラブホテルで

あった。『戦後史大事典』によると、高度経済成長期にモーターゼーションが進み、自動車での移動が日常的生活のなかであたりまえとなった時期に出現した「モーター」が「連れ込み宿」「待合」といった施設との差異を曖昧にしていた言葉とある。最初のモーターは、昭和三八年石川県加賀市の国道八号線沿いにできたといわれる。

風光明媚な須磨、塩屋あたり、国道沿いで計画しているという。母は猛然と反対した。私は大学生、興味本位で賛成したが、すっかり叱られた。父は純粹に商売として考え、投資をしようと考えていたようである。母に内緒でやればよいようであるが、帳簿は母にも筒抜けであった。その頃には、帳簿の整理、納税申告すべて私がやっていた。それは父の命令で、理由は簡単であった。私が経済学部の学生であったから、当然帳簿は整理できるもの、申告もできるものと思っていた。したがって母はその内容をたやすく見ることができた。とにかく反対。これも父は断念した。その後、須磨にオープンしたホテルは、業績を伸ばし、もう一店増やすことになる。父は未練たっぷりであった。

ただこれは投資しなくてよかったと思っっている。その後、同種のホテルは出店ラッシュとなり、差別化競争が激しくなる。たとえば、新型のベッドの導入など装置化が加速度的に進み、経費が急上昇して採算が採れなくなるケースもでてきた。父の友人たちも撤退することになる。母の生き方はそのとき生かされたように思う。

「市の風」

その母は私をよく街に引き出そうとした。私は父方の出身地である丹波に疎開をしていて、そこで小児性ポリオに罹った。当初、全身が麻痺していたようで、ひとりりで座することもできなかった。その私を負ぶって母は、阪大病院に連れて行った。ポリオに効く薬を阪大の助教授が開発したとかで、その注射を受けるためである。いまでも時折、夢にみるが、看護婦が四人係でベットに俯けになっている私を押さえつける。そこへ医者が高い鍼のついた注射器を持ってあらわれるのである。脊髄注射であるから、いかに私が泣こうが叫ぼうか看護婦の力でびくとも動けなかった記憶がある。そのあと、きびしい日差しの下で、アイスキャンデーを買ってもらって、川を歩き交う船を見ていたことを思い出す。なぜか肥船（肥料となる人糞を運ぶ）のことを覚えていた。しかし、その注射で事故が起こり、それを聞いた母は阪大行きをやめる。それからマッサージ科のある兵庫県立医科大学附属病院に通うことになる。その頃には左手だけに麻痺が残り、ほかは普通に機能するようになっていた。高学年になるとひとりりで通った。

その母が事あるごとに、むしろことを作って私を連れ出した。その当時の街は混沌としていた。焼け残った街区、焼け跡に建ったバラック、そこを歩き交う人々の服装は、派手な衣装に軍服を改造したものも入り混じり、子供心にぎやかなものであった。私自身、両親の服を手直したものを着ていた（これは写真に残っている）。

買い物、神社・仏閣への参詣、映画、実演など実に多彩であった。

加藤秀俊「二〇〇二」によると、これを「市の風」とよび、子供の教育の一環であつたらしい。たしかに、商人との駆け引き、街の賑わい、その裏にある危険なにおい、すべて実際に街に出なければわからないことであつた。

それに加えて警察に行くことがあつた。質屋は公安委員会の認可が必要な事業であり、警察による査察もおこなわれる可能性があつた。それは入質品が盗品か否かの調査であつた。警察官がよく来店し、品触をおいていった。盗品の説明書きと思えばよい。それと、手配写真である。盗品については、入質品の検査があつた。入質者カードと臺帳を見ながら、ときにこの商品を見せてくれといったことがあつた。そのなかに実際何度か盗品が含まれていた。盗品をその犯罪が発生した地域の警察（いわゆる所轄署）に持参し、必要な書類とともに提出する必要があつた。それは母の役目で、必ず私が同行した。大阪まで行ったこともある。

私が大学生になると、ひとりりでかけた。さらに電話加入権の質権設定が認められると、設定や解除などの手続きに行くことも私の役目となつた。

母が私におこなつた、むしろ私を伴って行った行動、この意味を考へることがある。私に質屋を継がせたのかどうか。そうではなく、むしろ漠然と自立して生きることのできる人間にしようとしたのではないか。頻繁に街に連れ出し、店の手伝いもさせる。その体験を通じて、社会を知る、自然に体得させる。このことを無意識におこ

なったのではないか、いま私はそのように考えている。

そのように考える切っ掛けになったのは、母が亡くなり、それを知った友人がお参りに来てくれたときのことである。その友人とは、大学二年の夏、北海道に遊んだ。当時、大学生の間で、北海道旅行が人気であった。充分にお金をかけることができなから、駅に寝る、ユースホテルを利用するなどして安上がりを考えての長期旅行である。「カニ族」と彼らは呼ばれ、大きな登山用のリュックを背負っての旅行である。私たちはそのような格好はしなかったが、一ヶ月を過ぎた。彼は旅行の際、母に「何も手伝わずにひとりですべてはし」と言われたそうである。荷物の整理、洗濯などすべてである。彼はそれを母がなくなるまで私に明かさなかった。自立を求める母の言葉と理解している。

新開地

神戸の戦後歓楽街といえは新開地であった。一九〇五年、湊川の付け替え工事できた新開地であった。国鉄神戸駅の西側、福原遊郭に隣接したところである。映画館、食事どころなどたくさんのお店が建ち並び、その名前を聞いただけで華やいだ気分になったものである。「ええとこ、ええとこ聚楽館」、母と新開地に行くとき、友人に行き先を問われ節をつけて答える言葉が耳に残っている。

母はもっぱら、この新開地を楽しみの場としていた。昭和二二年には、新開地のある兵庫区の常設興業場は一二館、そのうち映画館は九

館、劇場が二館、演芸場が一館である。昭和二五年には、常設興業場は一五館に増え、そのうち映画館は一三館、劇場が一館、演芸場が一館である。最も栄えたときには、映画館は二〇館以上あったといわれる。いまは、二館を残すのみで、そのうちのひとつ「パルシネマしんこうえん」は私の友人小山東之君（幼稚園、小学校の同窓）が父親から受け継ぎ営業を続けている。

神戸市は明治二二年に誕生している。当時、人口は一三万五千人であった。人口が百万人を超えたのが昭和十四年である。昭和三二年に市庁舎が三宮の現在地に移り、旧庁舎は兵庫区役所となる。兵庫区役所が新開地の北入口にある。その北側に湊川市場が広がり、多くの客で現在にもぎわっている。区役所の南に湊川公園が広がり、楠正成親子の像がある。それから南へ下がると、新開地である。小山君の父親が持っていた新公園劇場がまず映画館としてあり、それから南に映画館や劇場が次々と現れた。

この地区が経済的な地位を三宮に譲るのは、主に市庁舎の移転と遊郭の廃止による。福原遊郭は新開地のすぐ東隣にあつて、繁栄をさわめていた。三味線などを商う店（現在も残っている）もあり、三弦会館もあった。福原から神戸駅にかけて料亭も数多くあり、にぎわっていたことを記憶している。その福原が表舞台からされば、客は激減、新開地も客足が遠のくことになる。

それを進めたのが、ダイエーの神戸進出である。三宮の倉庫の空き家にダイエーが「主婦の店ダイエー」として進出、セルフサービスの

シヨップを展開した。これで、三宮が一変、三宮センター街は繁華街へと変貌する。センター街にあった風呂屋さんは、喫茶『カスカード』に変身した。その名の通り、店のなかに滝があった。風呂屋さんは全国の喫茶店を回り調査をおこない理想とする喫茶店をつくったというのを聞いた記憶がある。

市庁舎の移転、売春防止法の制定（昭和三十一年公布、昭和三十三年施行）による福原遊郭の衰退が人の流れをかえ新開地を嘗ての繁華街、懐かしい街にかえることになる。私が中学生になった昭和三十三年、それ以降映画は、朝日会館、新聞会館大劇場、スカイシネマなど元町や三宮周辺でみるが多くなった。

母はとくに好みがあつて映画を選んだわけではないようである。店の状況、気分にあわせて新開地に足を運んだ。当時、片岡知恵蔵は剣を捨てて、拳銃を操っていた。大友柳太郎、嵐寛寿郎、高田浩吉、長谷川一夫、三船敏郎、多くの俳優・女優を観てきた。そのなかでもとくに私の好きな俳優は、大友柳太郎と月形竜之介、その独特の癖のある言い回しを忘れることはできない。

のちに俳優の話を文楽の人間国宝となられた方の奥さんとしていたとき、「もつとも立ち姿が美しくしかも隙のない後姿をみせる」のは、嵐寛寿郎だといわれた。時代劇に数多く出た嵐寛寿郎の姿を思い出した。人形遣いの夫を持ち、ともに工夫をされていた方の言葉として記憶に残っている。

ふるさとをつたえる

事情を背負ってふるさとをでた者は、ふるさとを子供にどのように伝えようとするのか。なつかしく語るものもいよう。しかし母は、多くを語らなかつた。

前述のように母は七人兄弟の長女、女四人、男三人。丹波篠山で生まれ、農家であったことから、祖父の手伝い、祖母の手助けをよくしたと聞く。祖父について山に入り、柴・薪を背負って歩いた。また、祖父が丹波杜氏として家を空けているときには祖母の手伝いをよくした。父親がいない正月の餅つきは大変で、手伝いをしない弟に腹を立てる祖母を手伝ったようである。母が話す内容は、家での生活、自分の役割、祖父母の人柄が主であった。所有する田地畑の規模、山林の大きさなどに触れたことがない。松茸山を所有していたこと、篠山の料亭に頼まれ松茸などを卸していたことなどは、叔母から聞いた。

母は、祖父母の人柄、生活ぶりなどから、ふるさとを伝えようとしたと思われる。伝え方としては、きわめて優れていると感じている。生家の規模、周辺の様子、先祖の話、誇らしげに語るひとは多いと思うが、それにはほとんど触れなかつた。

祖父はとてつ読書家であつた。その祖父を母はとてつ尊敬していた。よく祖父が読んでいた本の話をしてくれたことを思い出す。また話が結構上手であつた。その母も読書家であつた。もつとも何か傾向的に、脈絡あつて読むのではない。向かいに貸本屋ができたことから、気の向くままに借りていたようである。

不思議な感覚で聞いていたのは、サンカという山の民と三角寛の話であった。随分と丁寧に話していた。私が中学から高校にかけての頃である。話の内容が順次展開していたから、どこかで本を読んでいたはずだと思っている。貸本屋に三角寛の本があったのかもしれない。

サンカは山窩と当て字するが、広辞苑では「村里に定住せずに山中や河原などで野営しながら漂泊の生活をおくっていたとされる人々。主として箕作りや竹細工・杓子作り・川漁などを業とし、村人と交易した。」とある。礫川全次『サンカと山窩』によると、丹波・丹後・但馬、いわゆる三丹地方がサンカの本場であるという話が諸書に見えたとある。母の在所は丹波である。

サンカの生活について詳しく教えてくれた。なぜサンカなのか。叔母や叔父で、サンカについて話した者はいなかった。母が、サンカのひとがウナギや細工物をもって売りに来たと言ったことが記憶にある。山里の暮らしをサンカを通じて伝えようとした。というより、ふるさとへの想いが高じて、たどりついた先に幼い頃の体験がサンカに結びついたのかもしれない。

折に触れてのふるさとの話、しかし母は私をふるさとは連れて行かなかつた。一度、篠山城址に遊んだことがあるが、それきりであった。むしろ、神戸でさまざまな体験をさせること、祖父母の生き方を自分の生き方で示すことで、ふるさを伝えようとしたと、いま考えている。父とは対照的であった。父は本家を継いだということもあつ

て、盆には故郷に帰っていたし、生家をすこし自慢にしていた節がある。

おわりに

母の晩年は見事な変身といってよい、変わりぶりであった。それが顕著になったのは、父が質屋をやめたあとである。『質屋の女房』という頸木から解放され、自分に忠実に生きようとしたのかもしれない。一時、元氣なときには、父と毎日登山に参加しようとした。

神戸は背後に六甲山があり、その中腹まで毎日登山をするグループが数多くある。ひよこ会が最も大きな登山会であるが、そのほかにインド人の会、中国人の会、あるいは業種毎の会もあつて質屋の毎日登山会もある。作家の陳駿臣さんが直木賞をもらったとき、中国の方々が毎日登山の人たちが集う茶屋でお祝い会を催したことを記憶している。母は父と登りだした。しかし、その勢いも膝を痛めることで頓挫する。実は、骨阻喪症にかかっていたのである。

それまで、常に前向きに生きた母であったが、健康を害してからは全く街にでなくなった。

参考文献

- 浅田修一『神戸最後の名画館』増補改訂版 幻堂出版 二〇〇一年。
朝日新聞『週刊まちぶら 神戸市兵庫区新開地』二〇〇四年十二月二十七日。
礫川全次『サンカと三角寛 消えた漂泊民をめぐる謎』平凡社新書294、平

- 凡社、二〇〇五年。
 笠原和夫 荒井晴彦 秀実 『昭和の劇 映画脚本家 笠原和夫』 太田出版 二〇〇三年。
 片山隆男 『庶民金融：戦後零細質屋史覚え書き』 『大阪商業大学商業史博物館紀要』 第五号、P.P. 三一—四四、二〇〇四年七月。
 家庭総合研究会編 『昭和家庭史年表 1926：1989』 河出書房新社、一九九〇年。
 加藤秀俊 『暮らしの世相史 かわるもの、かわらないもの』 中公新書一六六九、中央公論新社、二〇〇二年。
 神戸市 『第二回神戸市統計書 昭和10年度版』 神戸市役所、昭和一〇年。
 神戸市 『第三回神戸市統計書 昭和12年度版』 神戸市役所、昭和一二一年。
 神戸市 『第二八回神戸市統計書 昭和22年度版』 神戸市総務局統計課、昭和二二年。
 神戸市 『第二九回神戸市統計書 昭和23・24年度版』 神戸市総務局統計課、発行年不明。
 神戸市 『第三〇回神戸市統計書 昭和25・26年度版』 神戸市総務局統計課、昭和二八年。
 神戸市 『第三一回神戸市統計書 昭和27年度版』 神戸市総務局統計課、昭和三〇年。
 神戸市 『第三二回神戸市統計書 昭和28年度版』 神戸市総務局統計課、昭和三一年。
 神戸市 『第三三回神戸市統計書 昭和31年度版』 神戸市総務局統計課、昭和三一年。
 神戸市 『第三六回神戸市統計書 昭和33年度版』 神戸市総務局統計課、昭和三五年。
 神戸市 『第三九回神戸市統計書 昭和36年度版』 神戸市総務局統計課、昭和三八年。
 神戸市 『第四二回神戸市統計書 昭和39年度版』 神戸市総務局統計課、昭和四一年。
 神戸市 『第四五回神戸市統計書 昭和42年度版』 神戸市企画局統計課、昭和四四年。
 神戸市 『第五〇回神戸市統計書 昭和48年度版』 神戸市企画局統計課、昭和四九年。
 神戸市 『第五一回神戸市統計書 昭和49年度版』 神戸市企画局統計課、昭和五〇年。
 神戸市 『第五二回神戸市統計書 昭和50年度版』 神戸市企画局統計課、昭和五一年。
 神戸市 『第五三回神戸市統計書 昭和51年度版』 神戸市企画局統計課、昭和五二年。
 神戸新聞社編 『私たちの昭和史』 上下、神戸新聞社、昭和六〇・六一年。
 神戸一〇〇年映画祭実行委員会・神戸映画サークル協議会編 『神戸とシネマの一世紀』 神戸新聞総合出版センター、一九九八年。
 齋藤博 『質屋史の研究』 新評論、一九八九年。
 篠山地方観光協会編 『ささやま風土記』 篠山地方観光協会、昭和五六年。
 新湊川流域変遷史編集委員会編 『歴史が語る湊川 新湊川流域変遷史』 神戸新聞総合出版センター、二〇〇二年。
 世相風俗観察会編 『現代風俗史年表』 (増補) 河出書房新社、一九九九年。
 丹波杜氏組合 『丹波杜氏』 丹波杜氏組合、昭和三二年。
 丹波史談會事務所 『丹波水上郡誌 下』 丹波史談會事務所、昭和二年。
 鶴見俊輔 『戦後日本の大衆文化史 1945～1980』 岩波現代文庫、岩波書店、二〇〇一年。
 安岡章太郎 『質屋の女房』 新潮文庫、新潮社、一九六六年。

